
ポケモンオリジナルストーリー

KAEDE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンオリジナルストーリー

【Nコード】

N4429R

【作者名】

KAED E

【あらすじ】

シンオウ地方から戻ってきたサトシとピカチュウ。イッシュ地方に旅立つまでのオリジナル創作小説。

先生（前書き）

初心者の書く妄想の塊です。

練習のつもりで書いています。

変な文章になっているかもしれません。

私の実体験が混ざっています。

先生

カントー地方・マサラタウン。自然に恵まれたこの土地に町が運営する幼稚園がある。

実はこの幼稚園には一人の名物先生が居るのです。

朝。幼稚園を掃除する一人の女性。長い髪をお団子に纏め、服装はＴシャツにジーンズと動きやすさを重視した格好。

「ふう……。なんとか外掃除終了～。よかつた間に合つたあ」

体をほぐしながら箒とちり取りを片付ける。子ども達が登園するまでに掃除を終わらせる事は暗黙のルールだ。

「おはようございます。マキ先生早番お疲れ様」

「おはようございます」

女性の名はマキ。幼稚園教諭であり、マサラタウンでは知らぬ者無しの名物先生である。

「マキせんせ、おはよう！」

「はい、おはよう！」

「マキせんせえ、今日のシールは何処に貼るの？」

「カレンダーで確認してみて」

「・・・ママあ・・・・・・・・」

「ママお仕事頑張るって言ってたよ。頑張って早くお迎えに来るんだって」

幼稚園の朝は忙しい。親と離れたがらない子どもがいたり、昨日発

見た話を話そうとして数人同時に集まったり、欠席の電話や連絡ノートのチェック等やる事は様々だ。

子ども達全員に目が届かなくなる時もある。

「・・・しょうが無い」

マキは徐に腰に手を伸ばし、一つのモンスターボールを選んだ。

「出ておいで、ピカチュウ」

ボールから姿を現したのは電気ネズミのピカチュウ。

「ピカチュウ、お願いね」それだけで解ったのか、一声鳴くと泣いている子どもの元へ走って行った。

子どももピカチュウに気付き、抱き上げる。

「あゝ！ピカチュウ！！」

「私も遊びたい〜！！」

「駄目よ。今は元気の無いエリちゃんと一緒に居るでしょう？」

「いいなあ〜」

「皆はもう少し待ってね」

「ずる〜い〜！！！」

エンドレス

マキは小さく溜息をつくと独り言を言い出した。

「あゝあ、今日はサーナイトとドンファンも出そうと思ってたのになあ・・・」

「え？」

「ああでも駄目だなあ、お話聞いていないし。今日はもう出すの止めちゃおうかな」

「ダメダメダメ〜！！」

「僕お話聞けるよ?!」

「私も!!」

ニヤリ。

「本当？お話聞けるの??」

「うん、聞ける!!」

「よし。じゃあ先生はノートをもう少しチェックするから、皆はお片付けを始めて。午前中頑張ったらサーナイト達といっぱい遊ぼう!!」

「やったあ!!」

「みんな～！おかたづけだよ～!!」

子ども達への効果は抜群。

あっという間にそれぞれ片付けに走っていった。

（2匹には後で頑張ってもらわなきゃね）

午前中頑張った分、午後は凄かった。

ドンファンは子ども達の滑り台に、サーナイトは砂遊びやままごとに、ピカチュウは追いかっこにとそれぞれ引っ張りだこ。

結局その日、子ども達が降園するまで3匹ともボールから出たままだったのは言うまでも無い。

先生（後書き）

いかがでしたでしょうか？

まだまだ一話目、続きも投稿するつもりです。
その時はよろしく願います。

再会（前書き）

2話目です。やっとアニメキャラが少しだけ出てきます。

再会

一日の仕事を終えたマキはとある場所へ向かう。

オーキド研究所

ポケモン研究の第一人者でありここマサラタウンの、否世界的に有名な人物・オーキドの研究施設だ。

「こんにちは。博士居ますか？」

「あ、マキさんいらつしやい！」

マキの声を聞いて出て来たのはケンジという青年。オーキド博士の助手を勤めている。

「こんにちはケンジ君。博士居るかな？ポケモン達の回復を頼みたいんだけど・・・」

そう。マキが研究所を訪れた理由は、今日働きづめだったポケモン達の回復の為だった。

マサラタウンは自然豊かな田舎町。そしてこの町にはポケモンセンサーが無い。ジムがあるわけでも無いので特に不自由する事は無いが、必要な時はこうして研究所にポケモンを連れていくのが町の常識だ。

「博士は今預かっているポケモン達のコンディションのチェックをしていますよ。マキさんのポケモンは僕が預かります」

「ありがとうケンジ君。じゃあお願いします」

マキは3つのモンスターボールをケンジに預けた。

「時間少しかかるよね？私博士の所に行ってくるよ」

「わかりました。治療が終わったら呼びに行きますね」

マキが向かった先は研究所の裏にある森。この森に、様々なトレーナー達のポケモンが預けられている。

「おわぁー！ー！！」

「オーキド博士・・・これって新しい遊びですか？」

博士の元へ着いたマキは、己が目にした光景にただただ驚いてしまった。

簡単に説明すると、マキに気が付いたオーキド博士がケンタロスの群れに弾き飛ばされ、落下した所にベトベトンが覆いかぶさった。という状況だ。

「ベトベトンはいつも通りじゃれているとして、ケンタロス達に弾かれるのは初めて見ましたよ？」

「うむ・・・。今日はいつもと違い、妙に機嫌が良いのお。まあ、あやつが帰って来るから仕方ない！」

一人で納得するオーキドに、置いて行かれるマキ。

「博士？一体誰の事を言っているんです??？」

「ケンタロスやベトベトンのトレーナーでの、マキ君も知っている子じゃよ」

「私の知っている子？それって一体………？」

誰？と聞こうとした時、ケンジ君がやって来た。手には預けたモンスターボールが。そして隣にはピカチュウを肩に乗せた少年がいた。

「オーキド博士、ただ今戻りました！」

「おおサトシ！よく帰ってきた！！」

そこに居たのは、随分と遅しくなった教え子だった。

再会（後書き）

次はいつ投稿出来るかなあ
…

昔話（前書き）

マキの昔話が少し入ります。
まだまだ手探りの拙い文章です。

昔話

「久しぶりだねサトシ君！・・・少し会わないうちにずいぶん大きくなっただね」

「え？もしかしてマキ先生？」

彼が卒園して約5年。

彼が大会に出る度に町はお祭り騒ぎになり皆でテレビの前で応援していたが、こうして直接会うのは本当に久しぶりだった。

「それにしても、本当に久しぶり。君が旅立つ日に見送りに行こうと思っていたのに行けなかったからなあ・・・」

「確かあの時は数日前からジョウト地方に行っておらんかったか？」

「そうなんですよ。十分間に合うと思っていたのに・・・」

オーキド邸でお茶を飲みながら語るのは教え子の旅立ちの日の事。

サトシ自身は知らなかったが、マキは見送りに来るつもりだったらしい。結局叶わなかったが。

「そういえば先生の時はどうだったんですか？」

サトシは不意にそう尋ねた。自分の旅立ちの様子は、まあ皆知っているこの町の珍事だ。先生もオーキド博士から聞いた事は会話の中で分かった。

「じゃあ先生の時は？」

「私の時？そうだなあ・・・もう随分前の事だし・・・」

そう。パートナーを得て、初めて旅に出てからもう10年以上は経ってしまった。

月日が経つのがこれ程早いなんて、あの頃の私はきつと考えてすらいなかったと思う。

「ポケモントレーナーとして認められ、パートナーをオーキド博士から受け取ったあの日は今でも覚えてる・・・」

決して忘れることの無い、私達の旅の第一歩。

いつか見たポケモンリーグのテレビ中継。その時に見たリザードンに憧れて、最初のパートナーはヒトカゲと決めていた。同じ時期に旅立つ友達はおらず、前もってオーキド博士にお願ひしていた事もあり何の問題も無くヒトカゲを受け取ることが出来た。

「前日まで雨だったのに、旅立つ日はそれが嘘みたいな青空だったんだよ？」

「わたしも覚えておるよ。天気予報が全く当たらず、清々しいまでの青空だったのう」

（今にして思えば”あの子”が手を貸してくれていたのかも知れないけれど・・・）

「祝福されておったのかもしれんのお」

「祝福？」

サトシの疑問にオーキドは再び口を開く。

「マキ君はポケモンによく好かれる子どもじゃった。野生のポツポやキヤタピー等と毎日のように遊びまわっていたほどじゃ。」

根拠はそれだけではない。だがあの時思ったのだ。ポケモン達の気持ちが届いたのではないかと。

「ポケモン達の祝福かぁ。なんか分かる気がするなぁ・・・」
サトシもそしてピカチュウも、自分達の旅立ちの日の事を思い出した。

虹の向こうに飛んでいった神々しい鳥ポケモン、ハウオウ。

彼のポケモンは自分達の旅路を見守っていてくれるように感じる。

それからはケンジ君も混ざり、皆でサトシ君の旅の話を聞いた。

特にシンオウ時空伝説に関わるディアルガ・パルキア・ギラティナ。そして創造神とされるポケモン・アルセウスの名前が出てきた事には流石に驚いた。

神と呼ばれしポケモンとこの歳でこれほどまでに関わっている教えずに、私は一抹の不安を抱いた。

ポケモンに愛される事は良い。だが愛されすぎてはいないだろうか？以前、アジア諸島で海の神・ルギアと共に戦っていた事はオーキド博士やサトシの母・ハナコさんから聞いた。その時も驚いたが、きっと彼はこの5体の神以外にも伝説や神と呼ばれているポケモン達と関わってきたのかもしれない。

そしてその事実を、彼も彼のポケモン達も全て偶然だと思っているのかも知れない。

この世に偶然は無い。あるのは全て必然のみ。
彼等の出会いが果たしてどのような意味を持つのか。……………
私にはまだ分からない。

ちなみにサトシ君がシンオウ地方で出会ったチャンピオンマスター・シロナと私が友達だと知って、サトシ君とピカチュウはかなり驚いていた。

昔話（後書き）

時々思うんです。サトシは神に愛されすぎではないかと。

『この世に偶然は無い。あるのは必然のみ』

私の好きな言葉の一つです。

サトシの場合、この必然の先には何があるのでしょうか？

先にあるものがたとえどんな物でも、サトシにもピカチュウにも歩みを止めてほしくないと一ファンとして願っています。

母子（前書き）

タイトルどおりサトシのママ・ハナコさん登場です。
ハナコさんをきちゃんと書けているか不安です・・・。
バリちゃん出ません（汗）

母子

サトシが当初の目的であるシンオウ土産をオーキド博士に渡す事が出来たのは、マサラが夜の闇に覆われそうになっているような時間だった。

「すっかり遅くなっちゃったなピカチュウ。早く帰ってママのご飯を食べよう」

サトシはピカチュウと共に家へと帰る。研究所から家までも随分なれた道だ。

「ママただいまー!!」

「ピカー!!」

扉を開けるとキッチンから良い匂い。

「お帰りなさい。さあ、晩御飯できてるわよ」

母・ハナコの声に大喜びでリビングへと走っていくサトシとピカチュウ。やはり母の手料理に勝るものは無い。

親子二人、特に久々に帰ってきたとなれば会話にも花が咲く。

「そつえば、さつきオーキド研究所でマキ先生にあったよ」

シンオウでの出来事を一通り話し終えたサトシは、ふと思い出したように言った。

「あら、先生に会ったの？先生昔とちつとも変わってなかったでしよう？」

「うん、すぐに分かったよ」

それからの話題はサトシの幼少時代へと変わっていった。サトシの幼い頃を知らないピカチュウのために、ハナコは何処からか数冊のアルバムを引っ張り出してきた。

サトシは懐かしいやら恥ずかしいやら・・・。

「ほら見てピカチュウ。これはサトシの4歳の頃の写真よ、可愛い

でしょう？」

「ピカ！！」

「これは入園式ね。サトシったら泣いちゃってね……」

「ママ！そんな事までピカチュウに教えなくても……！！」

「あら、たまには良いじゃない。ね、ピカチュウ」

「ピカピカ」

いつの間にタッグを組んだのだろうかこの二人は……。

サトシは諦めたように別のアルバムに手を伸ばした。この頃からあまり親しい友達はおらず、遊具で遊んだりポケモンと戯れたりする事のほうが多かったように思う。

（そう考えると、シゲルやタケシ、カスミ、ケンジ……旅であった仲間達やライバル達との出会いは凄く大切なものなんだよな）
そしてポケモン達との出会い。全部大切な思い出。

アルバムのページを捲る。やはりどれも懐かしいと感じるのは、それだけの月日が流れたからだろうか？

「あ、この写真……」

「懐かしいわね。確か入園してすぐの頃だったかしら？」

サトシが見つけた一枚の写真。そこにはサトシ達園児と担任のマキが写っていた。言ってしまえば集合写真だ。ただし少し普通と違う。何故ならその写真にはリザードン・カメックス・フシギバナが写っている。それも3体ともマキのポケモン達だ。

あの時の事を今でも覚えている。何せ、初めて目の前でポケモンバトルを見たのだから。

遡る事約6年。春から夏へ移り変わる季節。まだまだ園生活に馴染めないサトシ達の前に突然その人物は現れた。

名前も顔も覚えていない。ただ怖そうなおじさんだと思った事は覚

えている。

そして何故かマキ先生にポケモンバトルを挑んだのだ。

（確か、最初は先生「やらない」って言ってたような・・・）

今にして思えば、あのトレーナーは非常識だった。相手の都合も考えず、いきなりバトルを挑んだのだから。

でもそこからが凄かった。いつもはお団子の髪をポニーテールに結いなおし、モンスターボールを取り出してバトルを受けたんだ。

先生のバトルを見るために、マサラの人達も集まった。俺達は本物のポケモンバトルが見れる、とそれだけでわくわくしていた。

3対3のバトル。実力差は俺達でも分かるくらい違っていた。なのに先生は皆が楽しめるように皆がわかる技しか使わなかったんだ。

バトルは先生の圧勝だった。悔しがって残りのポケモンを全部出してきたけど、先生のポケモン達に空の向こうまで飛ばされていたのは面白くて皆笑ってた。その時に撮った写真なんだ。

「あの時は凄かったわねえ。」さすが”って思ったもの」

「さすが？ママは先生のバトル見たことあったの？」

「ええ。町の大人は皆見たことあったわよ。有名人なもの」

「有名人？」

それは一体どういう事だろう。マキ先生はただの幼稚園の先生ではないのか？

「あら、サトシは知らなかった？マキ先生はね・・・」

その次に続く言葉に俺もピカチュウも、自分の耳を疑った。だって・・・そんな事誰が信じるというんだ。だけど、どこかで納得もしていた。だから先生に挑戦するトレーナー達がよく来ていたのか。

まさかこんな身近に目標としている人物がいたなんて・・・。

「マキ先生はね、女性初のポケモンマスターなのよ」

母子（後書き）

いかがでしたか？マキ先生のもう一つの姿をハナコママによってばらしていただきました。

まあ私の妄想の塊なので、何でもありません。

私、リザードン大好きなんです。でも他の皆も好きだよ？

・・・ポケモンの鳴き声は文にするのが難しいですね。今後はあんまり書かないかもです。

続きはまた次回、ということ。

想い（前書き）

新しい環境になかなか慣れない今日この頃。

テレビもネット環境も無いけれど、日々頑張って生きています。

時間はかなりかかりましたが、なんとか続きを投稿です。

想い

久しぶりの自分の部屋。自分のベット。ママのおかげで綺麗に掃除されていたその空間は、やはりポケモンセンターの個室と違って落ち着く。

サトシは仰向けになりながらピカチュウに声をかけた。

「なあ、ピカチュウ・・・」

ピカチュウはサトシの隣で丸くなっていたがまだ眠っていないかったようで、小さく返事をした。

「俺さ、小さい頃先生にすごく憧れていたんだ」

先生はサッカーや野球がとても上手かった。木登りは俺のほう得意だったけれど、登り方や泳ぎ方を教えてくれたのも先生だった。知らない事を聞くと、何でも答えてくれた。先生と一緒に『ポケモン大全』って本を読むと、本に載っていない事まで教えてくれた。大人はそれが当たり前なんだって思っていたけれど、そうじゃない大人のほうが大勢居る事を知って、やっぱり凄いなあって思ったんだよ。

そして強かった。

「全部うる覚えなんだけど、でも強かった事は確かだ」

先生とポケモン達が挑戦者を倒す姿は

「とても・・・かっこよかった」

「・・・戦いたい」

心の底から湧き上がる

「・・・挑戦したい」

熱い熱いこの気持ち

「先生に・・・先生のポケモン達に」

サトシがピカチュウに自分の思いを伝えている頃・・・。

「今日も疲れたあ・・・」

マキは家のソファでぐったりしていた。子ども達の前では基本的にいつも元気なのだが、家に帰ったとたん疲れが一気にくるので、ぐったりするのはいつもの事。一緒に暮らす母も家に居るポケモン達も特に気にした様子は無い。

暫くそうしていたかと思うと、マキはむくつと立ち上がり三つのモンスターボールからポケモンを出した。

「ピカチュウ・ドンファン・サーナイト」

そう、今日幼稚園で子ども達相手に奮闘したポケモン達だ。

「今日はお疲れ様。さあ、ご飯にしようか」

キッチンからは今日も美味しそうな匂いが漂ってきていた。

片付けも終わり、母とたわいも無い話をし、明日の準備も終わると自然とため息が出る。

「うん・・・年かな？」

元気よく旅をしていた頃と比べれば確実に年をとっている。昔は随分やんちゃな子どもだったが、月日はこつとも人を衰えさせるのか。

そしてそれと同時に、幼かった子どもが成長するだけの時間が流れたのだと実感する。

マキは上着を羽織り庭へと向かう。春になったがまだまだ朝晩は寒い。

庭へ出るとモンスターボールから三体のポケモンを出す。常に連れて歩くポケモン達、リザードン・カメックス・フシギバナ。最初の旅の時から一緒に居る、マキの古い友達だ。

彼等もまた、自分と同じだけの時間を過ごしてきたのだ。

「ねえ皆。私達が出会ってから随分と時間が流れたね」

唐突に話し出すマキに、彼等は静かに耳を傾ける。

「旅をして、ジムを巡って、リーグに挑戦した。沢山のトレーナーと出会って沢山のポケモン達に出会った。勝つ事もあったし負けた事もあった」

思いつく自分達の旅路。嬉しい事も悲しい事も悔しい事もいっぱいあったけれど……。

「私にとって凄く楽しい時間だった。皆にとってはどうだった？」
その言葉に彼等は自分の気持ち思い思いに表現する。その表情は穏やかで、言葉は通じなくても十分マキに伝わり、自然と笑顔になる。

「私はきちんと成長出来ているかな？……あの子達のように」

脳裏に浮かぶのは今日再会したサトシ。記憶にあるサトシはお調子者で、年上相手にも生意気な口を利く態度の大きい子どもだった。素直で運動神経もずば抜けていたが、自分の力を過信し過ぎるところが不安だった。

でも今日再会してみると、彼は見違えるように成長していた。今までの旅は彼にとって良い影響を与えたようだ。

（だいじょうぶだよ）

ふと聞こえてきた声。耳にはなく頭に響く声。

マキ達はさっと空を見上げた。

暗い夜でも分かる、宙に浮かぶ小さい影。滅多に人前には出てこない存在。

（マキは成長したよ。でも変わらない）

「成長したのに変わらない？」

（うん。優しい心、純粹さ、まっすぐなところ。ボクが君と初めて出会った時のままだよ）

不安だった。今の私で良いのか、彼等に相応しいトレーナーになれたのか。

（そのままの君だから、ボクもみんなもマキのことが大好きなんだよ）

影は宙でぐるりと一回転するとマキの前にふわりと降りてきた。

（ずっとずっと、ありのままの君でいて）

マキは思わず目の前の小さな影を抱きしめた。まだ幼かった頃、マキの前に現れたマキにとって最初の友達。

そして小さな影を抱きしめるマキの傍には、三体の大きな影。

「ありがとぅ。……ありがとぅ皆」

皆が居るから、きっと私は私のままでいられるんだね。

想い（後書き）

サトシとマキ。それぞれの想いの話。

人は一人ぼっちでは生きていけない。心臓は動いてもきつと心が凍りついてしまう。

”大丈夫だよ”

と言ってくれる相手がいる事は本当に幸せな事なんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4429r/>

ポケモンオリジナルストーリー

2011年10月7日18時02分発行